

佐柳アクセントの提起するもの

秋 永 一 枝

一 はじめに

岡山県笠岡市と香川県多度津町を結ぶ定期航路は一日にはほぼ四便、佐柳島は笠岡から二時間半、多度津から一時間の海上にある。(地図Aのd地点)この島は、香川県仲多度郡多度津町に属し、長崎浦・本浦の二集落があり、半農半漁の生活で出かせぎ多く、ために女と老人が多い。

三十九年十一月十六日、金田一春彦氏、金井英雄氏とともに、長崎浦の松田豊松氏(大正十年生)ほか中学生数名のアクセントを調査、四十年五月五、六日、秋永のみ再度長崎浦の松田氏、本浦の藪よし江氏(大正八年生)ほか、両集落の老人数名を臨地調査した。

佐柳アクセントの概略については、前記三名分担執筆の「真鍋式アクセントの考察」(『国語国文』41・1)に報告したので、それを御覧頂きたい。その「真鍋式アクセント」のうちで、真鍋島の南隣に位置する佐柳島のアクセントはまことに複雑な体系をもっている。金田一氏によって「全国諸方言のアクセントの数ある

中で複雑な点では恐らく日本随一のものであろう」と折紙をつけられたほどである。ここでは、佐柳アクセントが日本全国で、少なくとも内地方言の中でもっとも複雑なアクセント体系をもつと思われる理由をあげ、さらにそれが提起する諸問題について考えてみようと思う。

二 [A] 佐柳アクセントはアクセント拍の種類

がもっとも多い

佐柳アクセントは四種類のアクセント拍をもつ。即ち△高い拍 ○Vと△低い拍 ○Vと二拍の中で上昇する△上り拍 ○Vと一拍の中で下降する△下り拍 ○Vとである。佐柳アクセントでは、これらの拍を含むアクセントの型はゆるめられる場合もあるが比較的はっきりした音韻的対立がある。そこで私は、△高い拍 ○V △低い拍 ○V以外に△上り拍 ○V△下り拍 ○Vをみとめた方が体系がより整然とするのではないかと考えた。「なぜ金田一説のように△低い調素 ○Vと△高い調素 ●Vの二種類で通さずにアクセント拍とするか」という疑問をもたれるむきもある

う。私は、一拍を高低二種類の調素にわけて ●● のように考
えることには、まだ積極的に賛成できない。もう一つ、ハのぼり
調素 ●Vハくたり調素 ●Vはいわゆる金田一説の調素観では
みとめることができないだろうと思つたからである。

こうした問題は、モーラ及び拍の認定と関連して行く。柴田武
氏は ○・○や ●●はおみとめにならない。氏は「日本語のア
クセント体系」(「国語学」21)の中で、京都方言の「日、火、
碑」を2モーラ、「鳩」を3モーラ、「皆」を4モーラとされ、
その理由を次のように説明された。

「鳩」は、これまで、クサ、フネ(舟)、カゼ(風)と同じ
「二音節語」として扱われていたが、これもハトオのような
「3モーラ文節(アクセント論的単位)」と認めるべきだと
考える。「鳩」の音調を観察すると、低で始まって高に移
り、末尾に下降調の聞かれるような型であるから、もし、こ
れを2モーラ文節とするならば、ハトのトは、「低」のモー
ラでも「高」のモーラでもなく、第3の「下降」のモーラと
でも言うべきものを設けなければならなくなり、体系の整然
さがくずれてしまう。「鳩」と「毛唐」と、比べて聞いて
も、二つの間には違いがないと認められる。

柴田氏は京都アクセントの ハトオ・ケトオ の末尾の母音が
同じだと聞かれるところから、ともに3モーラとされるのだろ
う。しかし、私はあきらかか(京都・佐柳アクセントともに)引
く音の長さに相違がみとめられると思う。相違があると思われ
るものと同じモーラとすることは、いかにアクセント体系の整然

さのためにもせよ肯んじない。それよりも、柴田氏の避けられた
第三の下降のモーラ、加うるに第四の上昇のモーラを設けたい。
ここで、一言、おことわりすることは、京都アクセントなどの
ヒ・テ|・ト|などの場合は、私は二拍と考えている。即ち、
○・○・○とは考えない。これらは アメ・ハト・ミンナ(以上
京都ア)、ウタ・サカナ・ニワ・ニワニ(以上佐柳ア)などとくら
べて、引く音が長く、性質の異なるものと考えている。また、
ヒ・テとすると表記上にも難点が生じてくる。

また服部四郎氏はかつて「音声学」(193・194)で次のように
述べられた。

稀ではあるが、短母音にわたり音調の現われる例もないこ
とはない。日本語の高松方言(四国)には「*asobu*」(当
る)「*asobu*」(遊ぶ)のようなアクセントの区別がある。
即ち、ともに第二音節に高さの山があるが、前者は降り音
調、後者は平音調を有する。……音韻論的には *asobu*
と解釈される。^{註1}

そしてこれらを三モーラと解釈しておられる。今諸家の御意見を
を憶測して、表1にまとめてみた。(無印は京都アを、*は佐柳
アを示す)

表1

| | | | | | |
|---------|---------|--------|------|----|---|
| ヒ (日)、 | テ (手)、 | ト (台) | モーラ | | 拍 |
| | | | 柴田服部 | 金田 | |
| 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 1 |
| | | | 秋永 | 棟垣 | |

| | | | | | |
|-------------------|---|---|---|---|---|
| クサ(草)、フネ(舟)、ニワ(庭) | 2 | 3 | 3 | 3 | 4 |
| アメ(雨)、ハト(鳩)、ウタ(歌) | 2 | 2 | 2 | 3 | 4 |
| ニワ(庭)、アメ(雨)、カタ(肩) | 2 | 2 | 3 | 3 | 4 |
| ケト(毛唐)、コゾ(小僧)、ハト | 2 | 2 | 3 | 3 | 4 |
| ガ | 2 | 2 | 3 | 3 | 4 |
| ミンナ(皆)、サカナ(魚)、ニワガ | 3 | 3 | 3 | 4 | 4 |
| アカイ | 3 | 3 | 3 | 4 | 4 |
| ニワニ、アメニ、ウタウ | 3 | 3 | 3 | 4 | 4 |
| ミンナガ ウサギガ | 3 | 3 | 3 | 4 | 4 |

次に諸方言のアクセントを考えてみると、東京式アクセントのように、 \wedge 高い拍 \bigcirc \vee と \wedge 低い拍 \bigcirc \vee ですむ方言が大部分である。(東京で連語にあらわれる ハナサク、ネチャオキタの類は例外とする)。しかし、諸氏の御報告によれば近畿大部分、香川県(島も、佐柳島は地図d)、愛媛県三机(註2)、九島(註3)、富山県富山、石川県能登・小松、新潟県直江津・高田、青森県八戸地方・津軽地方・上北地方・下北地方、岩手県中部・盛岡地方・上閉伊地方、秋田県北部、埼玉県荒木村(a)、千葉県千葉・幕張(b)、隠岐島の一部、天草の一部、北海道重内(e)などには \wedge 下り拍 \bigcirc \vee がみられる。更に、 \bigcirc のほかに \wedge 上り拍 \bigcirc \vee のみられる地方をさがすと、香川県東半分(島も)、青森県下北地方、岩手県二戸郡地方、伊豆神津島(c)など小地域にしかみつからない。

また、 \bigcirc ・ \bigcirc が単語のどの部分に現われるかも、方言によって

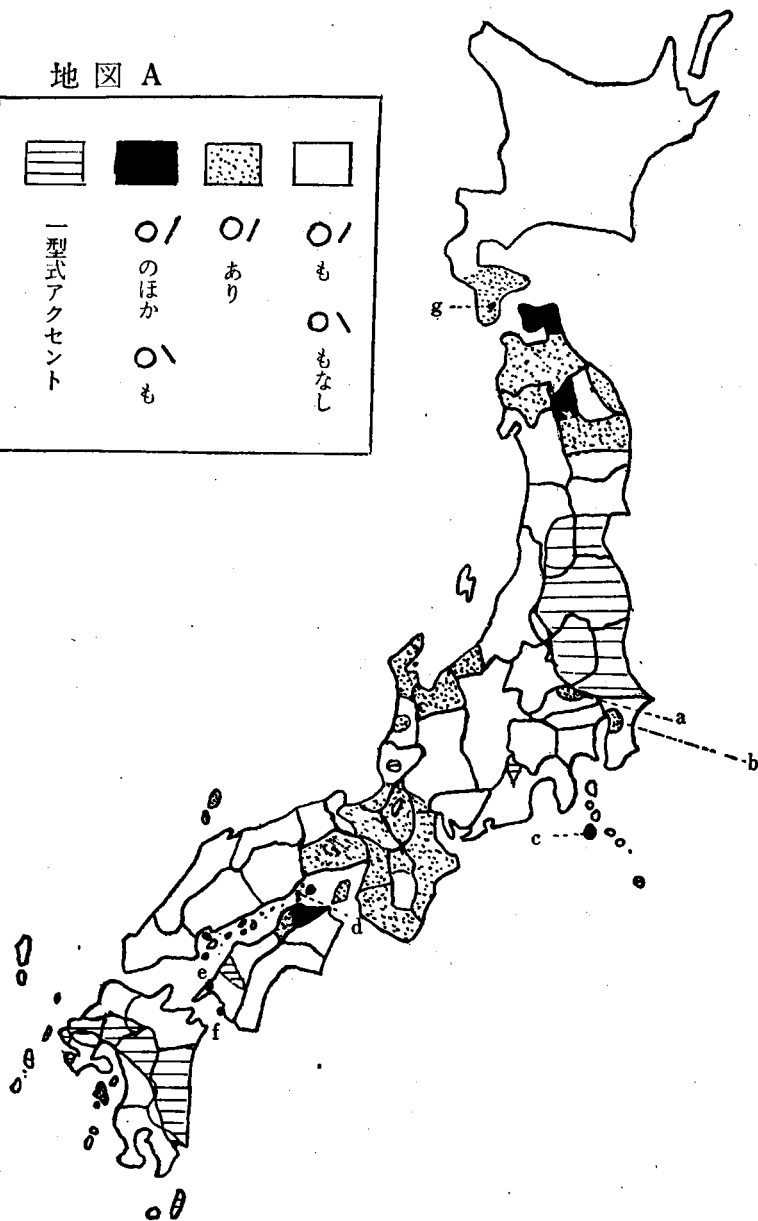
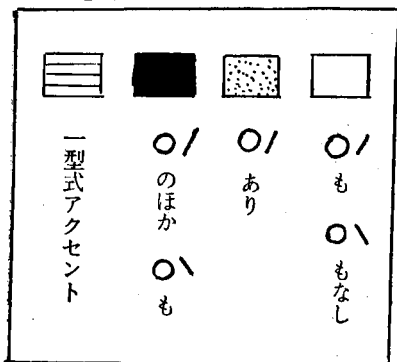
特徴がある。 \bigcirc は京都アクセントでは、アメ・ハトと単語の語末にくるが、助詞がつくと、アメガ・ハトガの傾向の人と、アメガ・ハトガの傾向の人と両型あらわれるようだ。榎垣氏は前者らしい。北奥のものも、アメ・ソラ・イトのように語末にくる(註4)。見坊兼紀氏、芳賀綾氏が指摘しておられる。更に芳賀氏によれば下北や二戸はアキ(秋)・ツユ(露)・アメ(雨)と \bigcirc が語頭にくるそうだが、柴田氏は下北方言の \bigcirc を否定しておられる。また平山輝男氏によれば、伊豆神津島(c)の少年層の発音には、イシ(石)・ハナ(花)・アタマ(頭)と語末に \bigcirc があらわれるそうである。ところが香川県東半分(島も)では、 \bigcirc も \bigcirc も単語の語頭以外にあらわれる。なお、和田実氏・平山氏・玉井節子氏は、高松アクセントの \bigcirc をみとめておられないが、稲垣正幸氏・金田一氏はソラ(空)・ハシ(箸)と認定されておられる。今、試みに、 \wedge 下り拍 \bigcirc \vee のあらわれる地方、 \bigcirc のほかに \wedge 上り拍 \bigcirc \vee のあらわれる地方を分類してみると、地図Aのようになる。

二[B] 佐柳アクセントは、同じ類の語が音韻のちがいによって別のアクセントの型にわかれる

諸方言のアクセントをながめると、音韻がアクセントを動かす方言と動かさない方言とがある。

近畿の大部分、四国の内高知・愛媛・徳島県及び香川県の西半

地図 A



分、九州の西南部、北海道にとんで、新十津川(は)、重内(ぎ)といった京阪式アクセントの地方などでは、音韻がアクセントを動かさない傾向がある。(和歌山県龍神・徳島県徳島市のいわゆる代り型は今ひとめないことにする)

(京都) コンパン、コイサン、チユウガク、ヒクイ
ところが、東京式アクセントの地方などでは、長音・撥音・二重母音の後部、母音の無声化する拍など、独立性の少ない音韻にアクセントの山がきた時、それを前後にずらす傾向がある。

(東京) ソツギ¹³ ヲ¹⁴ シキ¹⁵ ↓ソツギ¹⁶ ヲ¹⁷ シキ¹⁸、コクブンガク
↓コクブンガク、ケイザイリ¹⁹ ヲ²⁰ ク²¹ ↓ケイザイリ²² ヲ²³ ク²⁴、スクス²⁵
ク²⁶ ↓スクス²⁷

佐柳アクセントも、形容詞一類は、アカイ・カルイだが、トイとなるなど、この傾向がうかがわれる。

こうした傾向は出雲アクセントにおいて特に顕著である。出雲アクセントのいわゆる代り型、○○○型(灰が・船が・灸が・太鼓・浮い¹⁵・産んだ・せいる・豆腐)などは、加藤義成氏・大原孝道氏・戸戸俣氏・金田一氏らによって音韻的な型とみられている。そして東京アクセントの○○○型(神田・黄色・太鼓・産んだ)などはいわゆる「丁寧な発音」にはあらわれない音声的な型とみられている。オーイ(多い)、オシチ(お七)、コシカケ(腰け)にいたっては尚更である。私自身のアクセントではフク(吹く)、キク(来た)、チチ(父)などは音韻的な型としても動かないが、その他は問題が多く、ふつうは音韻的な型とみとめられない。表3の佐柳アクセントからも、音韻的な型としては省か

ねばならぬものもあるようだが、今はそのまま表にしておく。「代り型」のどこまでを、音韻的な型としてみとめるかについては別の機会に論じたい。

アクセントのこうした変化は独立性の少ない音韻にだけおきるのではない。それに加うるに更にはげしい変化の要因として母音の広狭があげられる。

香川県東半分(島も)、奥羽地方、石川県、富山県、出雲地方などでは、同じ類の語が母音の広狭のちがいによって、別のアクセントの型にわかれることがある。

佐柳アクセントも、たとえば二拍名詞の第2類が語末の母音の広狭によって異なったアクセントの型をとる。

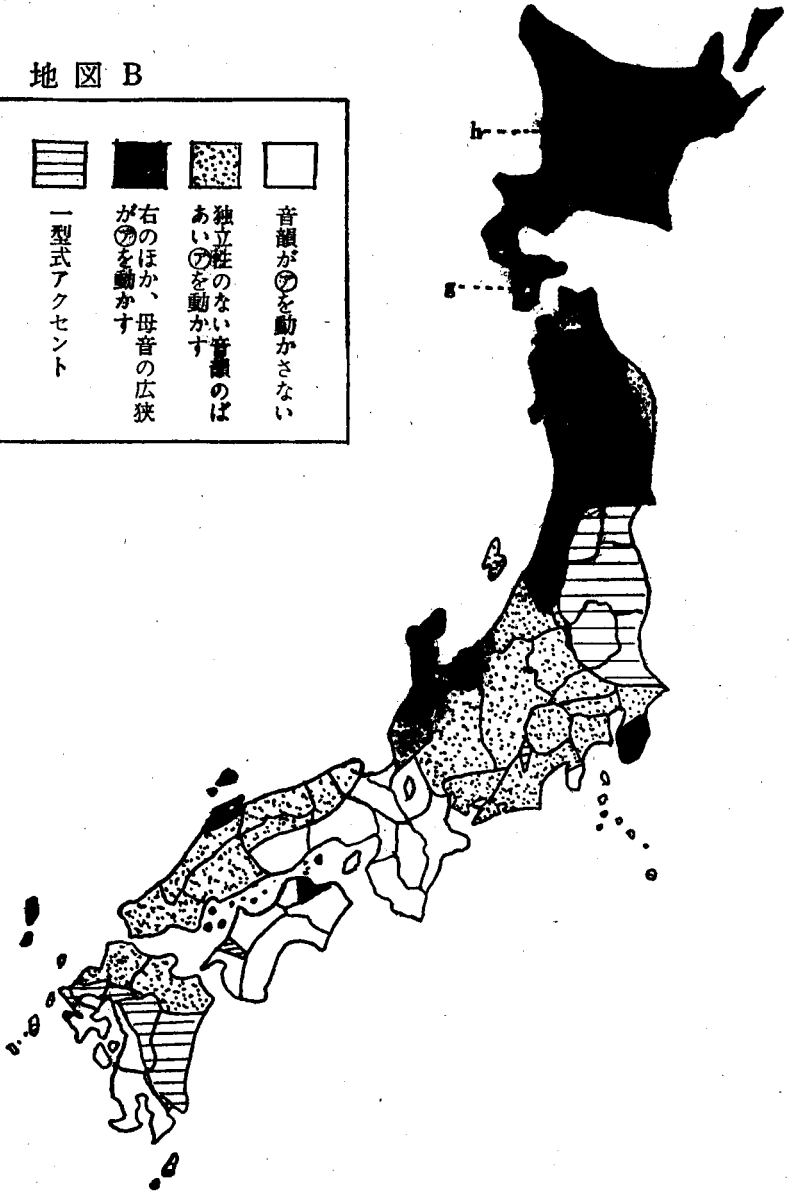
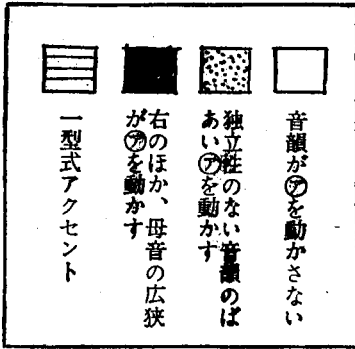
△広Vウク・ムネ・オト、△狭Vイシ・ナツ
今、諸方言のアクセントを分類してみると、地図Bのようになる。

更に佐柳アクセントでは、「が」「を」「と」「も」「の」のような広い母音をもつ助詞のつく時と、「に」「には」「にも」のような狭い母音をもつ助詞のつく時とで、アクセントが異なる場合が出てくる。更に「に」と「には」「にも」で異なる場合さえ現われる。たとえば、二拍名詞では次のようになる。

表2

| | | | | |
|-------|-----|------|------|------|
| 1類・5類 | ○○\ | ○○ガ\ | ○○\ | ○○ニワ |
| (庭) | (雨) | (雨) | (雨) | (雨) |
| | | ○○\ | ○○ガ\ | ○○ニワ |
| 2類 | ○○/ | ○○ガ/ | ○○ニワ | ○○ニワ |
| (音) | (音) | (音) | (音) | (音) |

地図 B



① 狭 (石) ○ ○ ○ ○ ガ ○ ○ ○ ○ ニ ○ ○ ○ ○ ニ

3類 狭 (山・犬) ○ ○ ○ ○ ガ ○ ○ ○ ○ ニ ○ ○ ○ ○ ニ

② 狭 (犬) ○ ○ ○ ○ ガ ○ ○ ○ ○ ニ ○ ○ ○ ○ ニ

4類 (肩) ○ ○ ○ ○ ガ ○ ○ ○ ○ ニ ○ ○ ○ ○ ニ

二 [C] 佐柳アクセントは、あとに付属語が続くかどうか、更に他の文節が接続するかどうかで、異なったアクセントの型をとることがある

佐柳アクセントは、名詞に助詞が続く場合、その名詞のアクセントが変化することがある。前述のようにそれはまた、その助詞の母音の広さ、狭さにも関係するのだ。
更にその上、それがそこで言い切りになるか、次に文節が続くかで異なったアクセントの型をとることがある。あるものは、名詞プラス助詞に他の文節が続くと前文節のアクセントが消失する。(△固V || △固定型V、△移V || △移動型V、△消V || △消失型V、△延V || △延長型Vを示す)

- ① (戸) ヒー ヒーガ△固V ヒーガデタ△固V
- ② (日) ヒー ヒーガ△固V ヒーガデタ△固V
- ③ (火) ヒー ヒーガ△移V ヒーガデタ△消V

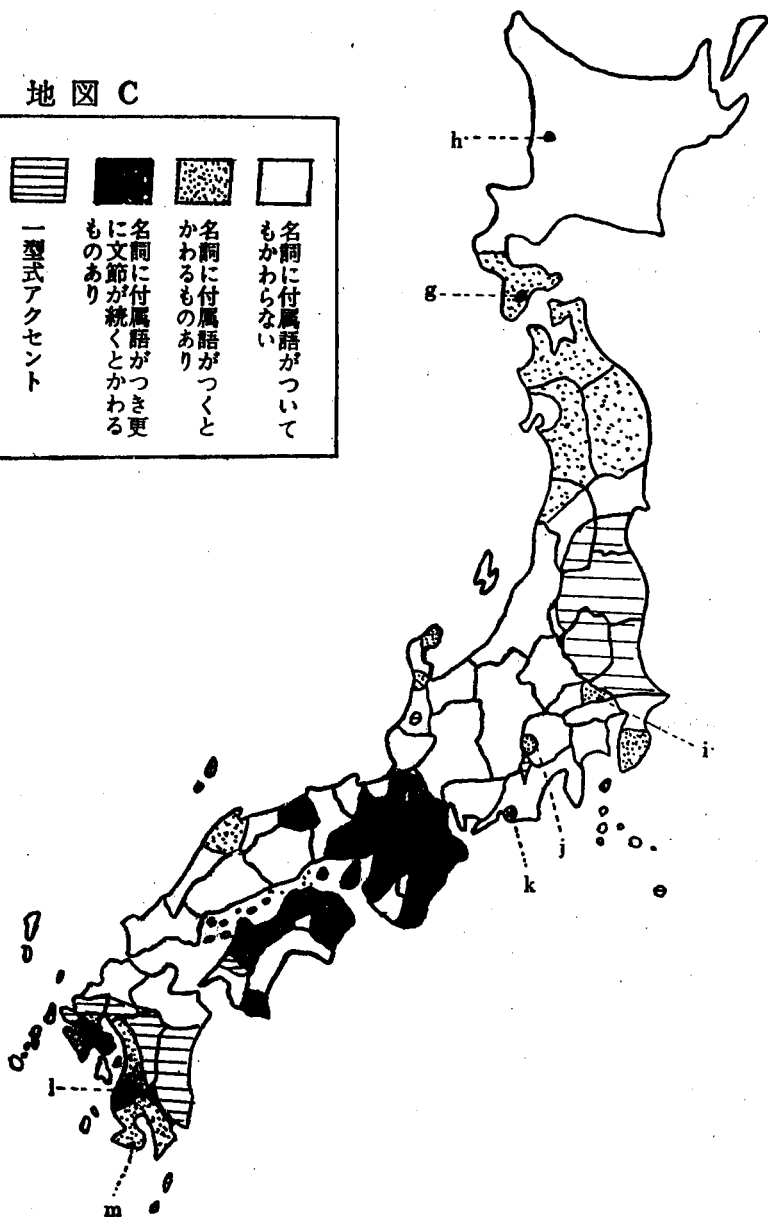
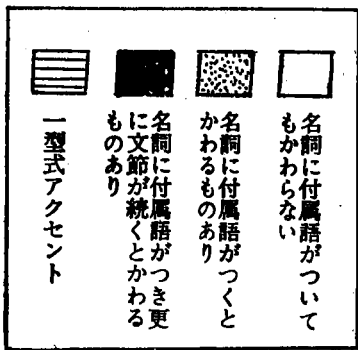
- ① (釜) カマ カマガ△移V カマガナイ△消V
- ② (雨) カマ カマガ△移V カマガナイ△消V
- ③ (鎌) カマ カマガ△移V カマガナイ△消V

- ① (魚) サカナ サカナガ△固V サカナガイル△固V
- ② (兜) サカナ サカナガ△固V サカナガイル△固V
- ③ (男) オトコ オトコガ△固V オトコガイル△延V
- ④ (兔) ウサギ ウサギガ△移V ウサギガイル△消V

勿論、以上のような傾向は、佐柳アクセントに限ったことではない。たとえば△名詞単独Vと△名詞+付属語Vでアクセントの変わる地方を次にあげてみる。

近畿アクセントの大部分^{註2,3}(十津川・龍神・田辺をのぞく)。四国では、香川県・徳島県・愛媛県の大部分、高知県の幡多^{註16}方言。北奥の大部分、山陰の東伯・因幡・出雲・隠岐、能登の一部分、埼玉県の一部分^{註5}(荒木村・蓮田町など)(i)、千葉県南部、山梨県奈良田^{註3}(j)、静岡県舞阪^{註17}(k)、九州西南大部分など。
更に△名詞+付属語Vと、△名詞+付属語+他の文節Vのアクセントが異なる地方をさがすと、範囲はもっと狭くなるようだ。
近畿・四国は前記の地方、山陰の東伯・因幡、九州の出水方

地 図 C



註18
音(一)、島原^{註3}方言など。

次に、二、三の例をあげてみる。

(京都) ③ 「手」、テ¹、テ¹ガ、テ¹ガナイ

④ 「空」 ソラ、ソラガ、ソラガアオイ

(東伯・因幡)

① 「魚」 サカナ サカナガ サカナガアル

① 「桜」 サクラ サクラガ サクラガサイダ

金田一氏によれば、鹿兒島県^{註18}桂町と、出水町とは、次のような対立があるようだ。

(顔桂) ハナ ハナガ ハナガチル

オトコ オトコガ オトコガオル

(出水) ハナ ハナガ ハナガチル

オトコ オトコガ オトコガオル

更に佐柳アクセントでは、動詞・形容詞の終止形と連体形のアクセントが異なる場合がある。こうした現象は現在非常に少ないようだ。

① (買う、着る) カウ、カウイス、コータ、コータイス
② (書く、見る) カク、カクモノ、カイタ、カイタモノ^{註19}

① (腫れる) ハレル ハレルモノ
② (晴れる) ハレル ハレルモノ^{註20}
③ (歩く) アルク アルクモノ

① (厚い) アツイ アツイモノ
② (暑い) アツイ アツイモノ^(M)
アツイ アツイモノ^(Y)

なお、金田一氏によれば、これにやや似た現象が奥羽地方にはいくらか見られるそうである。たとえば岩手県盛岡・花巻、秋田県湯沢・横手、山形県鶴岡など庄内地方にである。

厚い アズ アズモノ
暑い アズ アズモノ

以上をまとめてみると地図[C]のようになる。ただし、今まで諸方言のアクセントを示す場合、単語のアクセントの型だけか、せいぜい名詞の場合に一拍の助詞(「が」など)をつけた型しか報告しないのがふつうである。そのため、他図[C]で「かわらない地域」とした部分には相当不明の部分も含まれることをおことわりしておく。

更に私は諸方言のアクセントを分類する一つの方法として、接合連文節を次のような四つの組み合わせで分類することも可能と
思う。

(1) 前文節アクセント変化——後文節アクセント変化
(2) 変化——不変
(3) 不変——変化
(4) 不変——不変

ただし(4)のように前文節・後文節ともにアクセントが変化しないような方言はまだ見つけることができない。

以上のように見ていくと、佐柳アクセントは、前文節が変化したりしなかったり、後文節も変化したりしなかったりの方言と言えよう。近畿アクセントもこのグループにはいると思う。

しかし、前文節が変化しない方言もある。たとえば東京式アクセントの地方がそうで、土佐、九州の一部、加賀・越中・能登などはこのグループにはいりそうだ。ただし後文節は変化する。なお、ここで変化というのは△移動型▽△消失型▽ばかりでなく△延長型▽も含める。たとえば東京アクセントでは次のように解釈する。

ナガレ^ルナミズ[↓]ナガレ^ルナミズ (「水」のアクセントは消)
トリガナク[↓]トリガナク (「鳴く」のアクセントは延)

三 佐柳アクセントは型の種類がもっとも多

前述のように、佐柳アクセントは、アクセント拍の種類がもっとも多く(A)、更に音韻により(B)、更にはあとに付属語や、他の文節が接続するかどうかによって(C)、異なったアクセントの型をとるものがある。そのため、それらの要因のいろいろな組み合わせでまことに複雑なアクセント体系をつくっている。今、試みに佐柳アクセントと諸方言のアクセントを比較してみようと思う。主なる参照文献は次のものである。

高松アクセント 和田実「複雑なアクセント体系の解釈」(国語学)32)による。必要に応じて、金田一春彦・平山輝男
河氏の説を参照。

出雲アクセント 広戸惇・大原孝道「山陰地方のアクセント」による。

鶴岡アクセント 金田一春彦「地域社会の言語生活」のアクセント分担による。

鹿兒島アクセント 平山輝男「九州方言音調の研究」による。

今、諸方言の「三拍語」及び「二拍名詞十一拍助詞」のアクセントの型の数を比較してみると、佐柳10(または9)、高松6、京都6(または5)、出雲5、鶴岡5、東京3、鹿兒島2となり、佐柳アクセントがもっとも型の数が多。

和田氏は「高松アクセント」をできるだけ簡単な体系に処理されようとしたが、私は、高松や佐柳のようなアクセント体系は高起式・低起式、アクセント核の三元^註では処理できないように思う。では柴田氏のいわれる△のほり核▽をみとめれば簡単かというところでもない。いくら二元、三元と少なくとも、それぞれの方言アクセントによって、あまりに複雑多様な注意書や但し書が加わるのではとても覚えきれぬものではない。そこでこの際△高い拍 ○▽△低い拍 ○▽△上り拍 ○▽△下り拍 ○▽の拍単位に戻つて考えることも無駄ではないと思つた次第である。

(なお、この論文は、四十年十一月十日、第二回日本方言研究会での口頭発表をまとめたものである。地図作成に關して、未発表の調査まで御教示下さった金田一春彦先生に深くお礼申し上げます。)

注1 もっとも『音韻論からみた国語のアクセント』補説

〔国語研究3〕では、「高松方言にアクセント核が二種類

あり、あるとする必要がなくなる」として、「一／一／」

に訂正された。氏によれば、京都方言の「アクセント素

の弁別的特徴は、(1)核が有るか無いか、(2)有ればどこに有

るか、(3)高いか低いか、という点にある」のだから、二種

類おみとめになるわけにはいかないらしい。しかし、佐柳

アクセントもその解釈でとけるのだろうか。

注2 生田早苗「近畿アクセント圏辺境地区の諸アクセントに

ついて」(アクセント論叢)

注3 金田一春彦氏の御調査による。

注4 以下、北奥のアクセントについては、見坊豪紀「方言矯

正の原理と方法」(国語学4)、芳賀毅「北奥羽方言のア

クセント概観」(国語学会口頭発表、昭26・10)によるこ

とが多い。

注5 以下、関東地方のアクセントについては、金田一春彦

「関東地方におけるアクセントの分布」(日本語のアクセ

ント)によることが多い。

注6 「方言アクセントの型の推移について—伊豆神津島方言

を中心として—」(人文学報32)

注7 「複雑なアクセント体系の解釈」(国語学32)

注8 「日本語音調の研究」など

注9 「香川県下のアクセント」(国語研究20)

注10 昭和七年国学院大学に呈出の卒業論文に御報告の由

注11 金田一春彦「近畿中央部のアクセント覚え書」(東条操

先生古稀祝賀論文集)

注12 日下部文夫氏・柴田武氏の調査あり。「アクセント体系

を一つの式で表わす試み」を参照。

注13 「中央出雲方言音韻考—アクセント篇—」(方言六ノ六)

注14 「題名義抄のアクセントと諸方言アクセントとの対応

関係」(日本語のアクセント)など。

注15 大原孝道・広戸尊「山陰地方のアクセント」

注16 土居重俊「高知県幡多郡のアクセント」(国語学16)

注17 山口幸洋「静岡県舞阪町方言の文における語アクセント」

(音声学会会報100) など

注18 金田一春彦「柴田君の『日本語のアクセント体系』を説

んで」(国語学26)

注19 以下「……モノ」はすべて「……モノ」とも発音される。

注20 M・Yは、長崎浦松田氏と、本浦の藪氏のアクセントが

語類別に異なる場合のみ、松田アクセントをMで、藪アク

セントをYで示した。

補注

「真鍮式アクセントの考察」(国語国文41・1、14ペ)を次の

ように訂正したい。

三行 「八語末の渋い名詞Vの方は」の次に「イノチ」をたす。

五行 全行訂正。「は命」一例で不明だが、左のようになる。

九行 「イノチ▽……△延▽」

終行 「ウサギ」の左に「(ウサギ)」をたす。

【表3】 諸方言アクセント対照表

| 型の種類 | 型の数 | | 型の数 | | 型の数 | | 型の数 | | 型の数 | | | | |
|------|--|--|---|---|------------------------------------|---|-----|------------|--|---|---|--|--|
| | 佐 | 柳 | 高 | 松 | 京 | 都 | 出 | 箕 | 鶴 | 岡 | | | |
| | 10または9 | | 6 | | 6または5 | | 5 | | 5 | | 3 | | 2 |
| (1) | ①男(▽), ⑤姿(▽), ⑥兎* ⑦肩▽・箸▽ ⑧山が・犬が(…)* ①蚊▽・③手▽ ②書いた, 晴いた ②晴れた | | | | ⑥兎 ④肩が, ③手が ②晴れる ③歩く * | ①牛が, ②石が ①牛が・②石が (…) ①行きた, 足だ 売った, 借りた くじが, ④雁が (…) ②切った, 降った, 落ちた | | | 頭, 刀 足が(…), 足だ (山さ…) ①上がる, 当た | | | | 兎, 雀, 男, 心 雨が, 花が ②下がる, 晴れる ②白い, 白か |
| (2) | ①魚(▽), ⑦兎(▽), ②つるべ(▽) ①庭が・⑤雨が(…)* | | | | | | | 男, 心 山さ | | | | | |
| (3) | ⑤兎, ④肩▽・箸▽ △はこの欄か? * | | | | | | | | | | | | |
| (4) | ⑤朝日(▽), ①いわ し(▽) ③山に・犬に(…) ②動く・晴れる <M> ②暑い・高い<M>* | ②小 (…) ③歩く・隠す (…) ⑦炬(…) ④肩も(…) ①赤く・②高く (…) 命 ③花が・④肩が (…) ②帰る, 短きる ③歩く ②暑い, 青い | 朝日, 命, 兎 朝が(…), 朝だ ②晴れる, 動く・ ③歩く(…) ② 白い・高い (…) 小麦・心(…) ②音が・③花が (…) ②動く・晴れる・ ③歩く(…) ② 高い(…) (…) 魚, 形 風が, 鼻が ①上がる, 隠れる ①赤い, 赤か | | | | | | | | | | |

| | | | | | | | |
|-----|----------------------------------|--|---|---|------------------------------------|---|---|
| (5) | <p>○<u>〇</u>○ ○<u>〇</u>○</p> | <p>③はたち(▽) ①形(▽) ②音▽(…) ①腫れた ①赤い・厚い(…)</p> | <p>①形・⑤姿・⑧小差(…) ②歌が・⑤桶が・①当てる(…) ①赤(…)</p> | <p>⑤雨▽(…) *</p> | | | |
| (6) | <p>○<u>〇</u>○ ○<u>〇</u>○</p> | <p>⑦粟(▽)・②小豆(▽) ①庭に・⑤雨に(…) ①歌う・腫れる(…) ③赤く(…) *</p> | <p>娘・暎(…) ②石が(…)</p> | <p>②小豆・③はたち・④頭・⑤姿(…) ②音▽・③花▽・②名▽(…) ①赤い・②高い</p> | <p>兜, 涙 兜, 涙 秋が(…), 秋だ</p> | <p>③はたち・⑤姿・⑦兜(…) ④肩▽・⑤雨▽(…) 通る・帰る(…) ②高く(…)</p> | * |
| (7) | <p>○<u>〇</u>○ ○<u>〇</u>○</p> | <p>注・ごはん・天気・夫 金魚(▽)・氷・空気 ②石名▽(…) ①買うた・巻いた ①遠い(…)</p> | <p>②秋が・朝が(…), 秋だ ②賣いた</p> | <p>③はたち・⑤姿・⑦兜(…) ④肩▽・⑤雨▽(…) 通る・帰る(…) ②高く(…)</p> | | * | |
| (8) | <p>○<u>〇</u>○ ○<u>〇</u>○</p> | <p>手紙・はさみ・黄色・豆腐(▽) ②動く・晴れる(Y), 通る ②高い(Y), 多い</p> | <p>①庭も(…)</p> | <p>①庭が・①蚊が(…), 大鼓が(…) ①弾いた, 産んだ</p> | | * | |
| (9) | <p>○<u>〇</u>○ ○<u>〇</u>○</p> | <p>③大▽・足▽(…) ②動く・晴れる(Y), 通る ②高い(Y), 多い</p> | <p>①庭が・①蚊が(…), 大鼓が(…) ①弾いた, 産んだ</p> | | | * | |

| | | | | | | | |
|------|---|---|--|---|-----------------------------|---|--|
| | | | | せいろ、豆腐 | | | |
| 00 | ①鏡・⑤涙(▽) ②動く・晴れる… <M> ②暑い・高い… <M> | ①魚・④頭・⑤鏡・ ⑤風が・③山が ①風が(…) ②動く・たてる ②白い・寒い ②白(…) * | | 体 ①鼻が・②音が (…) ①細く、借りる ①赤い、厚い 頭、鏡 | | ①魚・⑥兎(…) ①庭(…) ①上がる、腫れる(…) ①赤い・赤く …… ①小豆・④頭 ①小(…) | |
| (11) | ⑥兎▽ ④肩▽・⑤箸▽… ①蚊▽・③手▽… ②書いた・詩いた | ⑥兎、雀 ④空が、松が* ⑥兎・④空が ②書いた・詩 いた | ①兎・④肩が・ ③手が・②晴 れる・③歩 く… ②書いた・詩 いた | | 魚、松、形 齡が、石が(…) (上がる…) | | |

【表3の注】

記号

…=そこで言い切らずに、あとに他の文節が接続する場合。

(…)=そこで言い切る場合、及び上記の場合。

▽=母音の広い狭いに関係しない助詞の一拍の代表。

が=佐柳アクセントで、広い母音をもつ助詞の代表。

に=佐柳アクセントで、狭い母音をもつ助詞の代表。

*佐柳アクセント

(1) 「③山が・犬が(…)」は(2)○○○型にも。「⑥兎」「④肩▽・⑤箸▽」は(3)○○○型かも。

(2) 「①魚(▽)」「⑦兎(▽)」「②つるべ(▽)」, 「①庭が・⑤雨が(…)」は(1)○○○型にも。

- (3) 「⑥度」 「④属▽・兼▽」は、(1)の○○○○型かも。とすると、型の数は一つへって9種類となる。
- (4) 「②着い・高い」は Mは時に (6)○○○○型にも。
- (5) 「②音▽(…)」はまれに(7)○○○○型にも。
- (6) この欄は (4)○○○○型にも。

* 高松アクセント

- (5) 平山氏「⑥雨が(…)」を(4)○○○○型に、「②歌が(…)」を「②石が(…)」と同じく(7)○○○○型に。

- (10) 平山氏(10)欄の名詞・動詞を(9)○○○○型に。形容詞は不明だが同様か。

- (11) 稲垣正幸氏・金田一氏は(11)欄の「⑥冠・兼」 「④笠が・松が」を(3)○○○○型に。平山氏は(1)○○○○型に。

* 京都アクセント

- (1) 奥村三雄氏は(1)欄をすべて (10)○○○○型に。

- (5) 服部四郎氏・和田実氏・生田早苗氏は「⑥雨▽(…)」を(4)○○○○型に。とすると、型の数は一つへって5種類となる。

* 鹿児島アクセント

- (7) に金田一氏は「兼じや」の類を入れるか。